

目 次

序 章	一
第Ⅰ章 中の品の女性	三
第1節 空蟬	三
第2節 夕顔	三
第3節 未摘花	三
第Ⅱ章 紫のゆかりの女性	六
第4節 桐壺更衣と母	六
第5節 藤壺	六
第6節 紫の上	七
第7節 女三の宮	四
第Ⅲ章 上の品の女性	九
第8節 菓の上	九
第9節 龍月夜の君	九
第10節 花散里	九
第11節 六条御息所	九
第12節 秋好中宮	九
第Ⅳ章 玉鬘十帖の女性	一〇
第26節 夕霧	一〇
第27節 頭中将	一〇
第28節 柏木	一〇
第29節 朱雀院	一〇
第30節 端役たち	一〇
第Ⅸ章 続篇の男性	一一
第31節 竹河巻	一一
第32節 八宮	一一
第33節 匂宮	一二
第34節 薫	一二
第Ⅹ章 宇治十帖の女性	二二
第35節 大君	二二
第36節 弁の尼	二二
第37節 中の君	二二
第38節 中将の君	二六
第39節 脇役たち	二七
第40節 浮舟	二七

終 章

あとがき	三五
索引	三三

第13節 玉鬘	一
第14節 近江の君	一
第15節 鬚黒北の方	一
第16節 真木柱	一
第17節 明石の君	一
第18節 明石の入道	一
第19節 明石の尼君	一
第20節 明石の姫君	一
第21節 姫君の乳母	一
第VI章 夕霧に係わる女性	七
第22節 雲居雁	七
第23節 一条御息所	一〇
第24節 落葉の宮	一〇
第VII章 光源氏の場合	一三
第25節 光源氏	一三
第VIII章 正篇の男性	一六
第26節 光源氏	一六

凡例

一 「源氏物語」本文の引用は日本古典文学全集本（小学館）により、巻・頁数を示したが、文中で明らかな場合は省いたところもある。表記は私に改めた場合もある。

二 古注釈類は、「源氏物語古注集成」（とうふう）所収のものを使用した。未所収のものは、「紫明抄河海抄」（角川書店）、「増註湖月抄」（講談社学術文庫）、及び、「本居宣長全集 第四卷」（筑摩書房）所収の『源氏物語玉の小櫛』を使用した。

三 各節ごとに、筆者のいう「わが身をたどる表現」の用例一覧を置いた。各用例の示し方は、整理番号、本文、文章の区別（「地」は地の文、「心」は心内語、「会」は会話文、「消」は手紙文、「歌」は和歌であることを示す）、鍵括弧の中は「話主→受け手」、用例が独詠歌の場合は「独詠歌」、巻名、頁数の順になる。

四 初出論文名と掲載誌名は、あとがきに記した。

五 索引は、総合索引として巻末においた。

序章	1
第一回	2
第二回	3
第三回	4
第四回	5
第五回	6
第六回	7
第七回	8
第八回	9
第九回	10
第十回	11
第十一回	12
第十二回	13
第十三回	14
第十四回	15
第五回	16
第十六回	17
第十七回	18
第十八回	19
第十九回	20
第二十回	21
第二十五回	22
第二十六回	23
第二十七回	24
第二十八回	25
第二十九回	26
第三十回	27
第三十一回	28
第三十二回	29
第三十三回	30
第三十四回	31
第三十五回	32
第三十六回	33
第三十七回	34
第三十八回	35
第三十九回	36
第四十回	37
第四十一回	38
第四十二回	39
第四十三回	40
第四十四回	41
第四十五回	42
第四十六回	43
第四十七回	44
第四十八回	45
第四十九回	46
第五十回	47
第五十一回	48
第五十二回	49
第五十三回	50
第五十四回	51
第五十五回	52
第五十六回	53
第五十七回	54
第五十八回	55
第五十九回	56
第六十回	57
第六十一回	58
第六十二回	59
第六十三回	60
第六十四回	61
第六十五回	62
第六十六回	63
第六十七回	64
第六十八回	65
第六十九回	66
第七十回	67
第七十一回	68
第七十二回	69
第七十三回	70
第七十四回	71
第七十五回	72
第七十六回	73
第七十七回	74
第七十八回	75
第七十九回	76
第八十回	77
第八十一回	78
第八十二回	79
第八十三回	80
第八十四回	81
第八十五回	82
第八十六回	83
第八十七回	84
第八十八回	85
第八十九回	86
第九十回	87
第九十一回	88
第九十二回	89
第九十三回	90
第九十四回	91
第九十五回	92
第九十六回	93
第九十七回	94
第九十八回	95
第九十九回	96
第一百回	97

本書は、『源氏物語』に見られる「わが身をたどる表現」のほぼ全用例を、登場人物ごとに表現性という観点で検討することを目的にしており、单一の主題で貫かれている。

この「わが身をたどる表現」とは、膠着語とされる日本語の性格に着目しての筆者の造語で、この命名は内容的な何かわりはないが中世物語の『我が身にたどる姫君』になぞらえている。日本語は、幾重にも続く修飾語をある一語に収束させて凝集性の強いひとまとまりの語句を容易に形成することができるが、そうした膠着性・凝集性の強い表現のうちで、「身」という語とそれにかかる修飾語全体で形成される語句を「わが身をたどる表現」と仮に名付けてみたのである。

この「わが身をたどる表現」を記号的に示せば「：身」と表示できる形のもので、具体的には「うき宿世ある身」「思ひのほかなる身」などという表現形式を念頭に置いている。前者の場合、「うき宿世ある」という修飾語が「身」一語を修飾しており、修飾・被修飾の関係で成立した「うき宿世ある身」という語句全体で、膠着性・凝集性の強いひとまとまりの表現になつていると認定できる。そして、このひとまとまりに構成された「：身」表現の形式で、当該人物の多種多様な身意識や自己認識が固有にたどられているとすることができる。したがって、「：身」の形式を「わが身をたどる表現」として捉え、その表現性を考える意義があると思われる。

身に対する意識、わが身や他者の身がどのようになつていて、表現の形としては、記号的に「身…」と「…身」との両者の場合が可能である。「身…」の形は「身」にかかる修飾語がなく、「…身」には「身」にかかる「

第Ⅰ章 中の品の女性

まず最初は、中の品の女性たちに見られる「わが身をたどる表現」を扱うことにしてみたい。登場人物は各章に分けてグループピングしたが、ここでは、空蟬・夕顔・未摘花の三人が検討の対象になる。未摘花を中の品に入れるのは問題があるが、いわゆる「帚木系」とされる巻の人物なのでここで取り上げる。また、明石の君は受領層出身なので中の品にあるが、ここでは扱わず、別に章を立てた。夕顔の遺児玉鬘なども別章である。この章では、空蟬において「わが身をたどる表現」は特徴的であり、中の品の人妻として光源氏とかかわったことで形成される身意識が連続している。残りの女性には特徴的な用例がそれほどないが、それは、人物設定のされ方に身意識がそれほど係わっていないからになる。なお、雨夜の品定めの体験談で登場する女性や軒端荻には用例がない。「夕顔」巻に登場する源氏の乳母に二例、「蓬生」巻の末摘花の叔母に一例あるが、掲出は割愛した。

【城山】未摘花の叔母お、日本屋の荷舟お、さる姫お、千葉五郎の妻お、

第1節 空蟬

空蟬は、光源氏とたつた一回の契りを交わしただけで、その後は求愛拒否の姿勢を明確に打ち出している。古受領の後妻に納まっている境遇、すなわち中の品の身分意識がそうさせているわけだが、拒否が単なる拒否でないところに空蟬の独自性があり、その内面的世界のあり方は「わが身をたどる表現」でも象られ、藤壺あるいは浮舟などときわめて近似した様態が見られる。しかし、玉鬘十帖での用例はなく、空蟬が主題的な重みを持つていて「帚木」「空蟬」「関屋」

巻に限られている。用例のすべては、次のようになる。用例の示し方は「凡例」を参照されたい。

〔用例1 空蟬〕

- | | | | |
|--------------------------------|-----------|----|------|
| 1 数ならぬ身 | 会「空蟬→光源氏」 | 帚木 | 177頁 |
| 2 いとかくうき身のほど | 会「空蟬→光源氏」 | 帚木 | 178頁 |
| 3 いとかくうき身のほど定まらぬありしながらの身 | 会「空蟬→光源氏」 | 帚木 | 178頁 |
| 4 心得ぬ宿世うち添へりける身 | 地 | 帚木 | 183頁 |
| 5 かるがろしき名さへ取り添へん身のおぼえ | 地 | 帚木 | 184頁 |
| 6 わが身 | 心 | 帚木 | 184頁 |
| 7 いとかく品定まりぬる身のおぼえならで | 心 | 帚木 | 186頁 |
| 8 空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな | 歌「光源氏→空蟬」 | 空蟬 | 203頁 |
| 9 ありしながらのわが身ならば | 心 | 帚木 | 205頁 |
| 10 うき宿世ある身 | 関屋 | | 354頁 |

右のように「：身」の形で形成される「わが身をたどる表現」が連續し、また、一定の指向性を持つつ多様に変容して展開していく自体の在り方のうちに、空蟬の身に関する内面が象られている。これらの用例は、個々をとつてみれば他の人物と同例のものも見出だせるが、その内実と展開のされ方は、空蟬に固有の在り方として認定できる。「身：」の形ではなく、「：身」の形であることによって、その「：」の部分で把握される内実が、空蟬において自己に固有の宿世であるかのように理解されるわけである。具体的に用例に添つて見ていただきたい。